

「きょうは仙台の佐藤さんの団体や。ちゃんと挨拶してや、倉之助。すき焼きを出すきに、あんたも一緒にして、おったらええわ。お座敷は弁慶とも蝶とつてあるし、佐藤さんたち喜ぶわ」  
仙台の佐藤さんとはもう十年来、小さな十五人くらいの団体だが、夏場に二グループ、稲の収穫後の秋に二グループほど、集落から金毘羅参りを出している、お得意様のことである。客はほとんど佐藤というのである。

タカの心積もりでは、朝の福代が弁慶に鈴をつたかしらから聞いていたので、四時にならないうちにしし辰へ戻って来たのである。

聡子も「おもっしょかったわー」と上機嫌である。ゴダンさんと話が合うらしかった。  
聡子はゴダンさんが三階の千鳥の間に戻っているあいだにタカに息せききって、  
「ばあちゃん、ばあちゃん、ゴダンさんはおじいさんまではフランス人やったんやつて。お父さんがカナダへ渡ってそのまま住み着いたんやつて。親戚はようけフランスにおるんやと。日本語もの

けられなくても、夕方のお座敷でなんとかしようと考えていた。福代が空振りでもそれは探りにすぎない。福代には修業までに頼んでみたんや。まあ見ててや。弁慶の泣き所を使えばなんとかなる。タカには一計があるようであった。

(七)

ゴダンさんは日曜で家にいた聡子と一緒に金刀比羅宮へ行つて、にこにこしながら帰つて来た。弁慶がお座敷より早めに来るのだということきょうようけ教えてもろた」

タカはにんまりして聞いている。  
「あんた、英語習いに丸亀まで行くことないやないか。この頃はガイジンが日本語習うてくれて、もう左うちわやないか」  
「ばあちゃん、うちフランス語習いとうなったわ」  
「ふーん。すぐこれや」  
「ゴダンさんは、英語、フランス語、日本語、それにスペイン語もできるらしい。すごいわ。それ

やのに、全然いばってない」

「いばってどうする。あのお方はなかなか大した方や。弁慶の三味線が気に入るだけでも、本物やわ」

「うん、すごいで。眼力があるんやな」

「カナダって、でもどこの町の人なんや？」

「モントリオールゆうてた」

「物盗りがおるとこ？ そりや、物騒やないか！」

「違う、モントリオール！ ばあちゃん、カナダ

の人が聞いたら怒るで」

「ちっ、舌かみそうや。モノトリオールでいこ」

夏のすき焼きもオツなもんやとタカは言う。

氷柱も届いた。タカからお客様へということ

氷柱には熨斗がついている。

「建て直しの時、クーラーは高うついたけど、思い

切ってつけてもろうてよかったやないか」

タカは佐藤さんご一行を迎えるので、この上な

く機嫌がよいのである。

そんな話をしている時に、

「こんばんわあ」

玄関の方から弁慶さんの声が出た。

タカは外国語だけでなく、和製の外来語すらき

ちんと覚ええない。なんでもカタカナ語は我流で変えた。

聡子は明日からの夏休みの補習がめんどうにな

ったという。ゴダンさんを案内して、丸亀城へ行

くほうがずっとええわ…とタカに言うのだった。

時計はもう五時を指している。宴会は六時から

で、お伊せさんやトミちゃんは福代の指図を受け

ながら、すき焼きのコンロや食器を一階の小広間

に仕込んでいてバタバタしている。

弁慶さんはよく通る声で、

「御家はん、御家はん、どちらの部屋ですか？」

と帳場の方へ声をかけた。玄関の籐椅子のところ

にいなければ、帳場や応接間にいつも大概タカが

いることをよく知っている。

「弁慶、悪いなあ、三階なんや。千鳥の間に先に寄

つてくれるか。私、ついてゆくわ」

「へえ、すみません。なんや大阪からわざわざ私

の三味線聞きに来られるって、お座敷やのうて、

ちよつとだけゆうて、へえ、若奥さんからゆうて

もらいましたけど。またテレビの人ですか？」

弁慶さんは階段をふうふうと上がりながら、先にゆくタカに話しかける。タカは「ふん、ふん」と返事をしながら、いつゴダンさんのことを言うか、ころあいを探っている。

千鳥の間の格子の戸をそーっとあけながら、タカは弁慶に振り返り、思い切つて、

「うまい、うまいと誉めながら、大阪から来てくれたんや」

「まあ」

弁慶は驚きと喜びに目が耀いている。

「あんななあ、それがカナダのお方でも弾いてくれるやろ？」

「へっ！ カナダ？」

「そうや。ガイジンさんなんや」

気配に気づいたゴダンさんが、中のふすまを開き、顔を出した。きちんと正座をしたままふすまを開いている。

「ベンケイさん、アリガトウゴザイマス」

「……」

弁慶さんは絶句して、そして、三味線を抱えて、

一気に階段の方へ走った。

タカはゴダンさんに

「ゴダンはん、少々お待ちください！」

「どかんかいな」

帳場の反対方向の応接間のもう一つの入り口の

方から、タカが弁慶さんをともなつて、応接間に入

つて来た。倉之助の座布団をさっさと奪い、弁慶さ

んに座れとタカが手招きしている。

「あんななあ、ガイジンさんゆうても、アメリカさんやないんやで」

「大阪いいよりましたで、若奥さんは」

「いや、大阪に住んでるカナダ人や。それは説明

不足つちゆうやっちゃ」

「どっちにしても私はガイジンに聞かせる

と大きな声で言うと、あわてて弁慶さんのあとについて階段に走る。ゴダンさんはあつけにとられたままである。

ワタシハナニカワルイコトヲイツタ？

ゴダンさんはタカの言うとおりに待つしかないかとふすまを閉めるのだった。

(八)

バタバタと階段を下りる足音がして、応接間に

いた倉之助と聡子は何事だろうと帳場のあたりを

部屋にすわったまま覗き込んでいた。

「三味線は持ちません！」

普段は温厚で、三味線を誉められれば、花代な  
しでも弾くといわれている弁慶さんの顔が怒りで  
青く見える。

タカは気を落ち着けるためか、いつものキセル  
に火をつけて、もう煙をくゆらせている。ふうー  
とひとつ大きな息をついてから、またこう切り出  
した。

「あんたガイジン嫌いってゆうが、それはアメリ  
カさんのことやろ？ あのお方はアメリカさんや  
ない。カナダさんや」

アメリカさんはサバ、カナダはバッテラ。そう思っ  
てみれば、わかるやろ」

変な説得の仕方があったものである。倉之助や

聡子はタカが怖いので、笑いをこらえて脇で聞い  
ているのだが、弁慶さんもうとうとう苦笑いの笑み  
を浮かべている。しかし、返事は思い切ったよう  
に、

「御家さん、すみませんけど、私、佐藤さんのお  
座敷もかかっています。ガイジンさんはごめんして  
くださいまし」

タカは声も出さずにうなずいていたが、にっと

「違いなんかわかりません！」

「いや、違いで」

「アメリカもカナダも一緒です」

「そう嫌い嫌いともめんといて。なあ、弁慶、  
あんたサバも嫌いやったな？」

「へえ、嫌いです。でも、それがガイジンとなん  
の関係ありますの？」

「ええから、聞きな。あんたサバ嫌いなのに、バ  
ッテラには目がないな、確か」

「へえ」  
「ほれみてみ、それやがな、アメリカとカナダは。」

笑って、目をキラっとさせると、

「弁慶、ほなお座敷行き。ただし、ただしや、か  
けますかいな？」

弁慶の泣き所を突いた！

聡子はそのせりふを聞いて、思わず心の中で、  
そうつぶやいた。

タカは繰り返した。弁慶は帳場への出口で立ち  
止まっている。

「なあ、かけましょ」  
まるで催促の口調である。

「あのガイジンさんが、このすし辰の仲居の仕事

十日勤まつたら、あんたが三味線をあの人の前で弾く」

「十日？」

「うん、十日。十日勤まつたら、あんたがなんぼでも相手の話聞いて、三味線弾く。これでどうや」

「十日ですな。へえ、いきましょ。かけましょ」

弁慶さんは「賭け」といわれるとかけてしまう

クセがあったのである。賭け事に弱いのである。

まさに泣き所を突いたのである。

「もし、十日できんかったら、それでおしまい。

聡子が分別じみた声で心配そうにたずねる。

倉之助はにやにや新聞を読み始めている。

タカは聡子の問いには答えずに、倉之助に大き

な声で、

「弁慶はんはさすがは長州、あれは尊皇攘夷の

血が流れてるわ。ほんでも弾かせる賭けには負けへんで！」

「おかあはん、勝算はあるのか？」

「まあ、見てなさい。それより倉之助、あんた早よ、すき焼きに行きな、佐藤さんに挨拶や、私もすぐ

あんたには私が新しいええ三味線あげる」

弁慶さんははじめから勝つたようなものである

と内心おもっていたが、タカが新しいええ三味線というので少しびっくりしていた。何か仕掛けで

もあるのだろうか？ はじめから負ける賭けをこ

の御家さんがするだろうか？ ええい、でも後には引けない。

弁慶さんは「ええです、かけました！」と大き

く言い残して、小広間へ消えるのだった。

「ばあちゃん、大丈夫なんか？」

行く」

聡子はタカがなんで自信を持っているのか理解

できない。ゴダンさんに仲居になれと話すのかしら。

「ばあちゃん、いつ話すん？」

「まあ、そういうことは明日の朝や。慌てるナン

トカはもらいが少ないってや。さあすき焼きすき焼き」

タカはなんの心配もなさそうな顔で帳場を出て行くのであった。

(九)

小広間のすき焼きの匂いは玄関の方にまで流れてきている。

聡子はその匂いをかぎながら、帳場の電話の

交換台のところで英語のリーダーブックを開いて

いると、ゴダンさんが階段をゆっくりと降りてき

て、聡子に声をかけた。

「タカさんハ？」

聡子はタカが宴会に行っていると伝えて、帳場の

大時計で時間を確認すると、ニッコリと笑って、

自分の脇に置いていたネスカフェ大きな瓶をゆするようにしてゴダンさんに見せた。

(以上12月17日放送分)